

補綴臨床 別冊
PRACTICE IN PROSTHODONTICS
EXTRA ISSUE

バーティカル プレパレーション 〈下巻〉

B.O.P.T.コンセプトによるトータルトリートメント

著

Ezio Bruna
Andrea Fabianelli
Jason Smithson

監訳

宮崎真至



Fixed prosthesis with vertical margin closure
A rational approach to clinical treatment and to laboratory
With the contribution of Giulio Pavolucci
Foreward by Gianfranco Di Febo



図7.2 プロビジョナルレストレーションを撤去して、フレームワークを試適する。



図7.3 口腔内において適合性の確認（tilting test）を行う。

フレームワークを切断し（図7.9），それぞれを支台歯に設置するとともに，フロスを用いて切断面を確認する（図7.10, 11）。この時，切断部の理想的な間隙幅は0.6mmである。切断面には確実な間隙が必要であり，一部でも接触していると，ろう付け部が脆弱化するか，歪みを生じることになる。

マージン精度の向上

Enhancing marginal precision

陶材が焼き付けられた補綴装置を試適する際は、メタルフレーム試適時に使用したのと同じの適合試験材ならびに方法を用いて確認するとともに、その後の清掃を行う。ZOEセメントを用いて適合性を確認する前に、ペーストを用いずに試適を行い、コンタクトを確認する。コンタクトがきつい場合には削除が必要となるが、この時、隣在歯との間に咬合紙を置くことで強く当たっている位置を特定する。コンタクトの調整は、コンタクトを過度に緩くしないように注意しながらファイン（赤色）のダイヤモンドポイントを用いて行う。

適合性の確認と調整は、Chapter 7で述べた方法と同様に進める（図8.1, 2）。このステップは、デギャッシングおよびセラミックスの焼成時の加熱によって新たな歪みが生じることで、接合部における調整が必要となる。

後ろう付けを行う場合は、ZOEセメントを用いたセラミックス試適時に、切断面にフロスを通して間隙が確実に作られていることを確認する（理想的には0.6 mm）。もし、切断面に接触が存在し、フロスを通すことができない場合は、ろう付け部が脆弱となっ

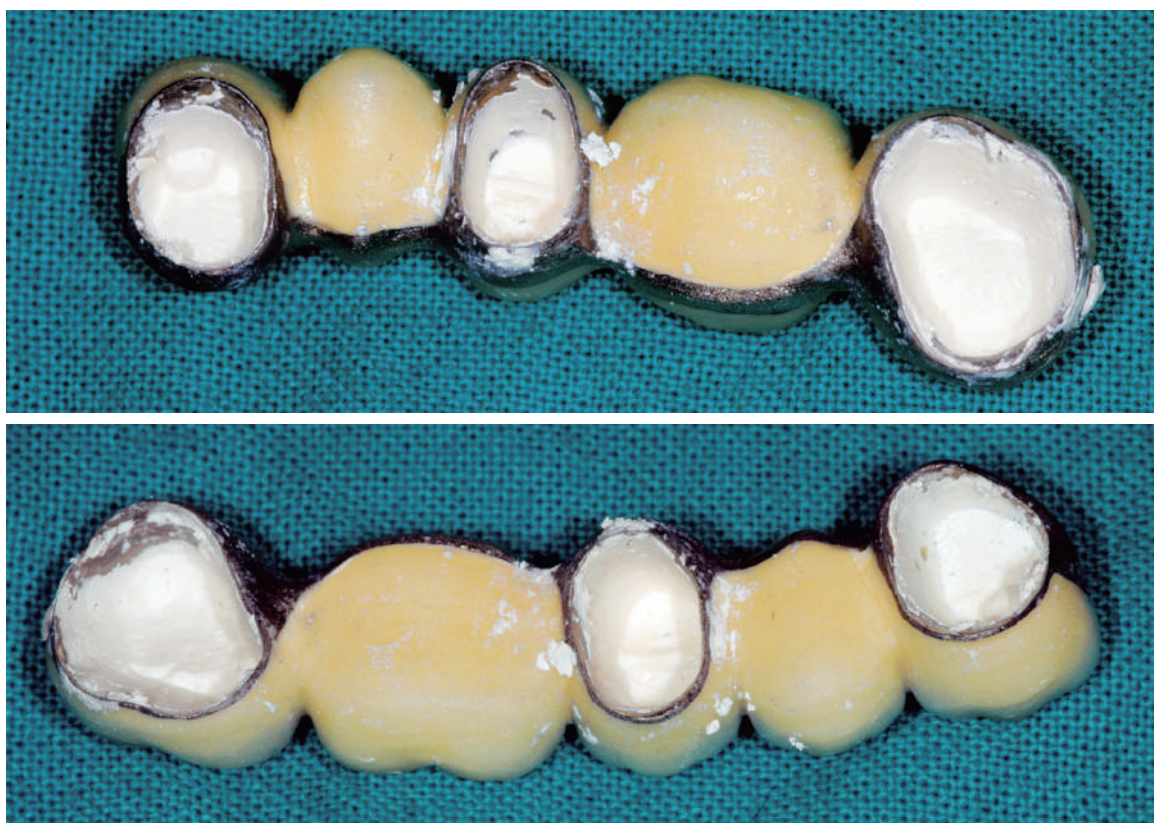


図8.1 セラミックスの焼成を終えた後、再度試適を行う。ここでは、前述した方法と同様に、ZOEセメントを用いて確認と調整を行う。



図9.15 歯間ブラシにクロルヘキシジンジェルを貼付するとともに、歯肉溝から全てのセメント残渣を除去する。



図9.16 参考症例① 前歯部補綴のケース。
左：上より順に術前，術中，術後
右：上顎歯列の変化



図9.17 参考症例② 前歯部ブリッジのケース. 術中ならびに術後4年経過時の口腔内.

臨床の実際 Clinics

固定性補綴装置において、フレームワークとしてジルコニアを使用するシステムが登場して以来、適切な支台歯形態についての議論がなされてきた。シャンファア形態は、疑う余地もなく正しいものであり（図11.6）、あらゆるマージン形態の中でも最も推奨される形態である。しかし、著者らは極めて初期の段階から、実験的に vertical preparation をジルコニアクラウンに応用してきた（図11.7）。最近では、vertical preparation は機械的抵抗形態と破壊抵抗性の観点から有利であるとされている。



図11.6 ジルコニアクラウンのための（改良された）シャンファア形態の支台歯形態.



図11.7 “vertical finish line” として形成された支台歯.